

埋木拾遺

291
42

24

中根ヒ郎一 贈

一 河川と村七郎

旧稿 言川草子の草稿

古河川草子の住處

古河川草子の言葉化

河川と村七郎

一 中澤村の今アササ

稿正常花の和歌 言川草子先生の草稿

一句御鉢次郎君

吉松の回顧

吉田相堂先生とお薦冬郎先生の恩讐譜

一 佐民生活

一 船玉三社之就テ

一 吉在文化院説

一 雪山と伊川海

291
82
1



河川と村落

東平妻郡に於ける各河川と其河口に傍生する村落とを觀
コノ河口の右岸に古方の村落と標賣繁榮、左岸に在る村落
落主之不及すさざか如一ノ北端新宮川ト、倭指古れ
一新宮川の右岸に新宮市ヨリ大市街迄左岸に鴻
殿城川ノ下小農村たり
二佐野川の右岸才幸久井の村落ノ左岸に佐野口平
郷ナリ
三那智川の左岸才林間民家のみ在るゝ又右岸才天
勝の邑星ナリ
四大田川の左岸才僅少古方農業大れリ右岸才芝
高實相續キ

五田原川の右岸下田原の部落戸多く左岸に田園

ト一人人家稀少

六津荷川又右岸に津荷の主力を集めた左岸に備
ノ島一小部分を過ぎて

七古彦川下流、左岸は古彦中陵あり高貴麗を連ねる、
八右岸に西向する高貴少く農業が盛興る

以上は如く各川の右岸古彦若く無葉し左岸に老翁僅た
有様ナリナ古彦川の又之十反一たる状態ナリ其茎

ノ所果一何く干在り也

試みに地形を以て古彦川の左右を比較する左岸古彦
之干地狭少く中陵に亘る廣からず而して左岸西向す
半埋藪洞ナリ大市街を作ざる餘裕得たり即自然的

1発展する地域あるが、然らず西向木久一ト田園
農園と左ノ右ノ林場たる古彦中陵小高貴族を連ね更に延
長一ト高川原一帯不及一ト所以ナニヤ宣子園ノ所ナリ
と謂ふ可汗也

元弘の頃閑東の豪族小山氏幕命を奉り一族即豈乃率ハ
1無罪干未ト也其居は古彦川の右岸ナトニ蓋其地形勝
多ヨキ以テ上林吉也當時高川原者左岸不在ケテ勢其下
小在リ後高川原氏滅々勢威を張り範圍の頃不及云て遂
小小山氏を凌駕至リ南紀古士傳子孫ル才小山氏
の食邑八百石ト布テ十高川原氏才即千石ト有ケツ時代
古彦川の河口大に變化一中陵生一ヒリ廢長の頃古彦川
の左岸海口ト高川原の終点ナシテ近長十町許の向

堅本村の海岸事業は古是室が千古未嘗有の大工事を
施せたり此に於く左岸不堅着の便生一中港古在港
湾設備漸く成る所の如く又上野山城の下交通の便
利に海陸運輸の要地となり河口道を整備賑に繁栄の基
礎を固く為す。

徳川氏の初々小方り落の御目所後所を置く。中澤村を
据え二部口後所を置く。古座池を擇り又岸の資力を以
て排水事業を開始せらる。あり王政維新の後不至りて
十年事務の民役局左近浦十置キ西オ周參見廿ト。東
は新宮十並ニ二部小屋八ト。區域を支配一左アシと
サ一古ア斯く左岸の地ノ政治的ノ經濟的ノ極めて極
要なる歩き合ひのこと、たりたり是子由ウ一之を觀

れ右古座川ト於ケ左岸の奈良才高川原氏不眞五所大
ナリと謂はざる可からず

無リ而一々歲月推移一今ハ紀勢鉄道の工事傍く進ニ
一二年の後才於ケ左岸西向工停車場の開設を見むと
其時十百リ左岸の繁榮身も漸く減退。他。各
川レ其朝モ一丁十丁の日。未だ土木を保せざる事
僅シ不古座ヒ西向ヒ往古地傍キ一区域たり
ヒナリ又曾て高川原氏ヒ小山氏ヒ川平陽ヒ勝利
支艦ヒ三小核ヒ勝利ヒ勝利塔ヒ氏の銭鋒を佐部ノ松
木勢千葉一其昌ヒ輕逐ヒ領土を擴張一左アシと有り
更不懐ヒ不近末交通接觸の完備大地方産業の發展を促
セヒナ一面不都市財敵の未熟を便リ。經濟界の集

大和ノ一地ニシテ城内小勝ニテ、織田大義也が臺ノ
了也等吉吾人ノ耳下小山武高川原氏ノ出ニテと之宣
也也甚而大矣（昭和八年十二月十三日移）

古座史談
華稿四

高川直氏傳記

高川直氏傳記

高川直氏傳記譜ヲ見ニ、高祖孝盛六歳越々無為、過十、第十四世
楊津牛角盛、至、初メノ北島氏三卿、長島、中、有元、二氏ノ
計ナニ薦功ヲ擣、次メ新宮其家族於内本房ナ、被薦推擧新左門
少佐同前、改メノアラ接ナ、勢一乘ニ大田三井南地、聚米ニシテノ詔
父比ハセ、歟ナ、於テ解也、

其子家盛、父共、吉田、義、恭ナ、又年當弱冠、嘗ヒテ本
領、守護ノ守、後朝鮮、役、水軍ニ属シ、戰功ノ表セニテ轉セ、

次メ高川牛角盛、津男吉平、守、役ヒテ大校長、陣、淺輪大郎
重然ノ聲ナニ殊無、ナシタニコトナリ、高川、勇取ニス、ニ、其
父比ハセ、歟ナ、於テ解也、

三郎、田井與三郎與ノ那智山廟、拂、後、一里、高川原ノ下ニ元、於日
ノ請、應永二年十二月四日、其又鑿、寺宇治部大輔佐佐ノ及メシニ
敷レタシニ見シ及ヒ、高川原寺宇、其ノ源ノ古少所也、ハナシレバ七
人死シ報シ、當事ハ憲ソ高輪セマタルシテ、後ノ御子。

鳴川原氏、其先祖傳之、號曰「柳津守」。唐時、佐日官將軍、博
大兄、其子詳子也。宋寧高祖、或功於楊、也。高川原氏
是也。其祖、則其某也。韓國、其孫也。以之、其先南朝、族
下、趙子也。西門子也。子也。一也。物々之、斯也。十一也。
故其系譜、期記也。其事、讀之、樂也。御書、其子也。其子也。
其子也。其子也。

高川原氏、生靈

高川原氏、其先祖傳之。高川原氏、三也。中村無盛、後承之、代。無
莊、生也。

代。無盛、高川原氏、三也。中村無盛、後承之、代。無盛、
南村古土傳之。高川原氏、三也。中村無盛、傳之、代。無盛、
南村古土傳之。高川原氏、三也。中村無盛、傳之、代。無盛、

莊、生也。

高川原氏、系譜、見之。高祖吉盛、名也。惟盛無罪、在之。生
十也。其子行盛、元慶、十二林、何也。無罪、生也。而之元
盛、子身盛、名也。根津牛住、堵路無罪、居於上、山青
原寺、云也。自盛、千葉刀家盛、第也。生源、長住、記也。
伊織國土記曰。高郡山治莊、吉盛、第也。池大納言賴盛、源行也。
信者、承也。高國、吉盛、莊、通也。吉盛、莊、領也。嫡子、信者、那
智山、高、高川原氏、住也。生、吉盛、第也。次男、吉盛、集也。吉
盛、莊也。高川原氏、住也。生、吉盛、第也。高川原氏、居也。
之記也。及之高川原氏、高川原氏、生也。吉盛、第也。其
向、生也。信也。

少、少、少、少、毒水、貴、王惟盛八島、陣シ候シ、無事、逃、大死シ様
シテ、解説ア嘉物、達、一部川井、山牛、被難シテ、古事記十三年、節三、
其、時、御、利、ヲ、守、タ、シ、テ、源氏、勢力盛、日、益、強、大、十、千、氏、過
類、亦、十、千、氏、過、萬、十、千、氏、彼、惟盛、千古、代、世、接、身、佛、歸
ニ、二十、五年、十、九、高、源、氏、凶、又、ノ、榮、ナ、シ、想、到、云、高、川、草、氏、七
原、始、方、ク、シ、天、地、猶、躋、シ、夥、シ、色、川、女、杜、十、威、大、路、那、當、山、齊、
以、少、源、氏、視、織、シ、難、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、

承人、頃々及早、池大納言、源平係共事、酒井・事々、其次子作保、則高
川平井、不仕へ、藍崎莊子銅不也アリ、當時、嘗て、鎌倉、一平氏、對
之、亦甚爲大二様也、某翁類、般不整不憚々々及、之、至々々々々々々々々々々々
而云、吾々萬川平井の形也、村名の以テ元出ナレタ也、我時代、後ナニ
セサルハカラズ、

次に藍崎氏、勢力一派にして、高麗平氏滿ノ頭角ヲ現シテ、小山氏井
・南條義重・奇ノ受ケ、更ニ根津千葉盛・時至ニテ、左中清・利シ、
銅城・唐・朝翠・張・名ニトヨ梅二月十九日。

古文真賞

古座界、大字古座+西向井、大字西向+、往古地續キシテ、嘗年
古座川、高瀬界大家高瀬子高瀬平邊ヨリ、湾曲シニ、西向井大字
西向+此溪ノ流、同禁大家神命+、溝、法カリ、代保傳角上式
半井源三郎保古座事、榮之曰、

井出海口+トテ、越前古一里幾ナリ、村、海口、今、神、三ニレ、其
今水原上ヲ名葉ト、又今、川底、横山傍上ノ神、川ニ
古、川底、越邊リテ、地稱卑シ、諸無毎日草木、東、岸ヌテ、
今、かナリ、西向井、火葬院、十ツ二

井詔、加、之ニ越邊ノ根、十ツ二、西向井之名、古越井中、西
向例ナリ、稱、シレタノ界ナリ、言、係タス、又、所謂也、可、係
之、往古古座川、木谷筋ナリシト、謂、信地今云高瀬川、木谷ナリ
也、半井、如、所上ノ名、井、越井上ヶ地ニ云ア、即元保傳角上式
半井源三郎保古座事、榮之曰、

古證ニシテ、列、住古神社、西子御作コニシテ見シ、元西向井、
在、之、同神社、古座源、川原村、氏神ナシ、ソノ後、劍
祀、曰、西向井、古座源、始、傳キニシテ、一部、カナレコト高瀬云
之、

然、則古座川、水深莫化シ、古座源、始、傳、斯レタハ何、頃ナ
ナトカニ、是乃前古神社、劍祀ト之時ヨリ後ニシテ、而、今
、大字川底、源ナシ、傳、斯レタハ時ヨリ前ナリ、斯セサルノ序
者、云、舊約、年、許、不、持、祭、シテ、奉、祭、年、十、多、八、勝

一、此川、古事記、詩、書、舊約聖經等千秋一傳アリテ
院、真ツタツケ高木ナシテルカシ。後天正二年、甘利神社、古多良神社
、今把セヨ、昭和五年、至、若松寺、大本寺等、既ト吉切構、
先、往五之峰、セイタツ、大本寺構善ニ相ス、四百年許ナムアミサセ
ル。依テ牛若丸ノ神社ノ御社、頃、拉致シタツ、ナガトスレバ、則古御
社、約四百年許、ハ前ナガトス、推測、準メシ。
又古壁、寺、古屋川源、一義行村母率ナシ、造レタキハ、成御殿長特
代、一、故赤口碑、傳レシシテ、其邊跡ニ尋ヌニ、古多良神社前
道筋、中央、點々其石碑シ讀、祭、祭、中、前年古屋川源母經合
人跡跡コシクリー、建物ナシカニニ際シ、其在壁工事中、裏地
、中、中部ヨリ才ナ獲率、巨岩シ發見シタキソ自擊亭、上、右奥谷
(古屋川)注、敷、祠、古石ソ讀シタクシテ、并点ソ整シ一形

古東初、下總守卒、所謂慈惠氏時代、竹築造ニシテ、某年代ノ推セ、
今天正三年(1575年)、古、當。

以上、古屋川源ノ推セ、古屋川、水深ナシ及シタル人ナシ、
百二三十年(1575年)、古屋川源、前ナガトス、
明治維新、後、無所、森林盛、邊境セシテ、山岳、土砂ナシ、著
川、森ナシ、新井川、昭和二十三年、洪水アリ、古屋川ノ同ニ
十五年、洋大アリ、其未開方、修業ナシ、之ニ向想スル人ニ高
寶、栗子、金子、寶、想、去正文福、上日、據築、營設、
船舶、建造、計等川園、山林嶺リニ伐採セシテ、ニ、因テ洪水泛
濫ナガリ、水深一大丈余化テ、其ノ伐採ナキニ集セナリ

河川、林落

東年善部、於テ各河川、其汗、作木林落ト、被ル河川

左岸ニテ村諸、摩古等之左岸、下村諸、人友、サカ加
乃北端新宮川、傳持ス

一 新吉川、右岸、新吉川市附地、首レ左岸、鶴殿市川、
村古

二 佐留川、右岸、牛久井、村落ニ左岸、佐留、不歸十
那古川、左岸、林向民家、墨在スル、右岸、天滿、邑里也

四 大田川、左岸、僅サシ留着家ナリ、右岸古里、而實相傳+

五 四百川、左岸、下田川、部落聚落シテ左岸、田園ニ人家稀+

六 波音川、右岸、津荷、左カソ集山ニ左岸、僅ニ支一里、上部約三

キホンノ

以上、か、各リ何レニ左岸、繁葉、左岸、古、
新川、ニテ、不レタ松鷺ナキ、其基、所異レア何ニ左、ヤ

説：地形ノ以テ古座川、左右、比較スレバ左岸古座、平地狭小ニテ牛込
ニ較、廢々、右岸西面、平坦廣闊シテ大市集ナ作ニ、綽ニ、綽裕
リ而自然絶、發展、地域、古野ナニアリ、此ニ西向、又レク田園農
圃トナリ而ヒテ狭小、隆起古野中瀬、南、櫻ノ瀬、北、御子瀬、近
年更、延長、高川、第一帶、及、之所以、ニ、室、才、國、新ナビ、請
ノ

元弘、頃、間東、豪族、小山氏幕命、之奉ニ、一旅郎黨、ノ草ニテ、然那、東
ノ其先、今、御河、於、草、ト、無、其、所、被、替、古、シ、バ、ナ、シ、宣、禁、者、御、草、云
在、在、ノ、勢、其、下、ア、後、高、川、原、氏、漸、勢、威、強、興、國、境
ノ、及、シ、連、山、氏、之、清、高、ア、前、南、氏、古、傳、依、ニ、山、氏、入、食
足、八、百、不、少、ア、前、御、元、兩、千、石、ト、ア、慶、其、頃、太、若、リ、左、岸、海
百、萬、川、等、至、於、表、十、界、向、御、軍、左、薄、岸、ツ、其、底、是

三十古市曾有、一大土工ナ船セリナリ竹、於テ左岸、港湾設
備ナリ次テ中、港底、沙テ更ニ古屋、漆ナリ竹、如クシニ上陽山城
ノ川越、便用、海陸聯絡、甚特、ナリ口拉工芸術、御器、御
室、基礎ナリレバ也

築三月、高一丈、方、漆、皆日所以所ソ置、中漆ナガヒ二郎、日所
置、木屋ナ擇ニ又漆、皆カナハテ林縫、車草、人前縫セリア、
王坂、新、後、至、ナリ、其幕幕、民被向、古屋、宣ナテ西、因參見
ヨリ東、新、宣、ニ、事、無、ト、西、國、博、ナリ、斯、左
岸、地、政治的、經濟的、極メテ権、要、古、歩、公、ヒコト、ナリタ、是
ニ由クシニシテ、古、並、行、在、左、岸、築、辰、高、川、原、氏、有、フ、所
シト謂フ、アラナリ

出、而、年、歲、月、日、甚、少、記、於、築、國、工、事、滿、之、二、年、續、於

テ、梓、右、岸、西、向、古、塗、川、停、車、場、剛、設、見、シテ、不、其、間、
設、時、至、左、岸、築、出、率、”漆、”減、退、于、他、各、川、
某、朝、ソ、ニ、ス、ニ、日、其、ニ、被、ナ、キ、ヤ、ン、重、八、才、シ、壁、不、留、机、八、
年、而、外、夜、中、漆、傳、不、甚、燈、下、甚、文、ソ、草、然、リ、筆、ナ、糊、ナ、
機、無、ク、シ、之、ナ、久、シ、ノ

卓見、與、先、光、竟、如、玄、上、殿、院

昭和八年三月六日

古座在右

中條村の今昔

中條村の古事の盛衰と産業の消長と人丁を明か一編一役
上條少の記録故に詳説を依り其大筋を述べる。
元禄の頃より中條村の戸数僅小十二戸たりてことを代々
言傳、たりて其頃十津川郷の土所屋村より中條村不
移り來り再來二百餘年延継経承一を了答口氏の名人の
手に語られ一序有り而一其十二戸の内同老人の記憶
不存一近年未だ存在したる家は山下治平、牛平太左衛門、
津川庄次郎、小岸惣七、白河屋忠次郎、白高屋某又云三
萬上云下右事持該格取取次工門主の如者也、文化二
年六月五日吉辰亦八時方ノ同家可否考之、一
谷口左士の七死をうと云へり
古事傳書原寺坂才丈著石地蔵草堂、享保十一年九月

置古ノ其傳不文古ノ傳裏石塔古ノ享保五年の説古
同寺境内ニ鐘堂古ノ享保年付の達三十六又鐘堂古
懸古所の梵鐘古享保十年の鐘送幸進古所たり而一
中墳古の正法寺境内古所之在ヨ草師の如古石像及古地蔵尊
像古古享保年間古安置古了所大久^{上ニ御音信}_{多不思考也}同時代年
古可一享保の頃二村古方一子施設の成り立ツ不微古ル
古當時考古相當古寺古聖局を立古寺古と推測一得
而一古華昌の依子所古聖傳古持經古海運古業中達
古才古立一古海運業古一古一古
其後古暦年間古帝目所移所古屋敷浦古中墳古移古
れ古れ古是亦其繁榮を除一古一因古百一く昂以上の
ニ本古元禄古文政古の向古於古古人口增加の量古
古

一七三〇と若一ら日

即總參古中墳古の戸數古文政三年十八十二戸古
古天保ノ一年古七十戸古天保ト文政三年近古
十八年古古文政三年ト古天保ノ一年近古ニニ一年古
古廿二期向古於古立敷古異象古叶敷古有古者古
百八十戸古七十戸古博一後考古二十一年古十二戸
古減一たウ

天保ノ一年後補整古無し古其後三十三年近古明治
五年古中墳古立敷津荷古田原古川原古平川古壁山古柏山古池山古池
口十ヶ村古敷合計九百九十六戸古有古天保ノ一年古於
古廿十ヶ村古敷合計八百七十九戸古有古者以古十三
十三年前古百十七戸古博一其博加章古一刻三知三事古

古の中期向ニ於ケル古墳中漢小形物の一枚革あり昂古墳傳
ト木ノ本の氏族向多移レル中澤村ニ活の編岸所該武場
諸備品を移レル年華郡小松け田中落領の政事文化の
中心地となりたれど前記十ヶ村半戸数の增加一社百社
時の中澤古墳ニ村士多カケリニと有言を俟たる者有

一
以上の事實不外木中澤村の舞祭其一半官廳の設置
他の一派は海運事業不存、右三十一年如一無れヒシ其
海運の業は古びて拮抗一派、當迄傳の中洋の勢力博大
ノつれ一派く裏ハ之十代ノ木綿業の種類あり

舊時時代古墳川流下の木材中製板十キサウチの木中澤村近

モ不税籍の手工作工製板せられたりが後新後明治

十年頃ノ一派次好院正義一更ノ明治二十七八年の戰後
ノ一明治三十七八年の戰後後小豆了ナリハ同ニ未嘗有
ノ殿賤を極めたりシケ谷口忠人の教へ語る所す
當時牛澤村の不税小壹ノ下宮傳村今上又古墳川岸一
所許の河川在リ其地前面之卑く汀堵ヒ古背面之緩傾
斜ニシテ土子耕地ノ不材牛脚小便ナリシカク其邊一
帶小波水產建石列ナリ不鏽の櫻木不税穀の事相傳シテ盛
況ノ一隣村亥川系村も廻堵の邊より上少又北ノ口村
田種最弱莊地の傍卑ナリ一處小其地向の西向古田
村碑、川村上ノ行船ノ便玄の地小不税小壹の設有リ
相続江口盛不税業一七
總二の數才翁記古村通一最盛時千二百人を越一

蘇中中津村に家多數戸三四百人小及公優不首修を云めたり

製板用材は一擔以上の巨材一丁一丈の玉又不板子コイタ
と立一尺数也又土字モア之を賣シし弊^{ベン}トナリ
木地ト下せり此等が古松川の河身小模太れた岩石
を破碎一丁水路の障碍ト除きたること有

當時中津村の営業者子母東又吉、花房六蔵、森明政、前田伴
七、石川吉兵衛、川端嘉三、谷口左近、松平左衛門、谷口長太
郎、岩谷松の諸氏有りて大抵原料を高野原地ノヒヌ未だ
製板工兵庫邊小穂出一町九十九步^{メートル}利潤を得たり
ヒナ谷口老人の語有り此時代古東中津村の景氣繁榮
ナリニラカヨヘ

明治四十三年の頃高崎山下丸三製材工場起き一櫓被襲
材を初以後山林製材ニシテ製キ、別不丸山製材の工場成リ
更少紀年木材株式会社の創立有り西向村一千津利
喜左衛門山下源太郎答相岩三郎^{兵庫}金木支吾^{上野}不
宣日又市の諸氏並十人正製材會社の如ク相次^レ製材工
場^レ設^レ盛^レ機器^レ古^レ從来の人力製板^レ走^レ機械
工業十歷^レ古^レ一時其盛況半謡歌^レた了中津村の木挽
事業^レ其盛^レ没^レ下^レ不至^レ
不振事業影^レ潜^レ一中津村^レ主^レた^レ産業大^レく大^レ
十二三年以來^レ産業小^レ不^レ有^レ其國^レ大^レく産業多^レか
す先^レ少^レ人^レ家^レ漸^レ増^レ加^レ一^レ良國^レ不^レ衰^レ一^レ佳^レ地^レト^レ有^レ
生^レ産^レ地^レ不^レ生^レ産^レ地^レ化^レ一^レ少^レく^レ見^レ了

或曰明治の初年中薩摩十島を率て以一船廿五門を有する
吉田柳馬、津川除兵衛、林田新助、白瀬屋、柴次郎、神保市右衛
門口、猪毛正之、之小次、
者少からず、今ノ若日と大
不思議を覺えたり。其有りと
昭和九年五月二日記

榎本常三の和歌

榎本常蔭の和歌

常蔭名は掃部といひ、紀伊國兩年善郡朝来村の醫師。榎本有敬の男、また醫と業とせり、資性温直にして世子を好み、熊代繁里に學びて和歌をよくす、文久四年八月十六日卒す、同村圓鏡寺に葬る、法名は眞歸良實居士、その詠歌は清濁集に載づ。

立春 雪うへにはつ日にはひて残ニ、ろすがくしくも春は未にけり。
正月七日春立けるに

たちかへる春のしるしかな、草の若菜のいろに空もかすめり
早春河 カゼさむみ浪の花のみさくら河たつやかすみもかた流れにて
野鳥 うぐいすの声にひかれて子日せし小松が原にまたし未にけり
水柳 鮎つらぬ里の子もなし岩田川やなぎのいとのたれそめしより

春月 帰雁 涠の夜の月のかゞみにむかひては花に心もうつらざりけり

夕花

はつせ山花の光に人ればぬてゆふべをたどりあひのかね
山のふりしかやの軒はの花盛りえださへたわに傾きにけり

草庵花

わかば山しげろ木の間に咲花はみどりのそらの雲のひとびら
あづまちのおいその杜の梢さへわか葉にかへる夏はきにけり

社新樹

山卯花 わらはべがたぶてにやらぐ川ほねの葉まはなれとぶ葉かな
水辺蠻

樹鶯納涼かせきよき軒の松の下涼みよも縫ぬべきこゝ地こそすれ
田家夏夕ゆふ序よ涼しきかけを百ちたびくみてはこぼす水ぐるまか赤
立秋 風前雁 なか空のきり吹はらふ秋風になびくもさむしかりのひとつ
残月 芭菊 あけ瀧る空はみどりの満として月のみふねもあさひらきせり
手すさびにゆひしまがきの菊の花もてあそぶべき時はきにけり

もみぢ見にゆきて

初冬 冬のくる方やいづことあがむれば朝きたえて時雨ふるなり
落葉埋石ニケ衣にしきにかふる心地しておち葉に埋むいしたみかゑ

寒芦 音さてきた吹風にかれあしのほわたのふきうちみだれつ

湖氷 うす氷かぢにくだくす音すありやはセのわたりあすや絶るん

霞千鳥 きぬゝのとこの浦わに鳴すとあかつき千鳥いづちゆくらむ

朝雪 さし出う朝日は雲におほはれてまばゆきまでに雪そつもる
歳暮 おるはたの末のひと日とありにけりあすは霞のきぬや立ちむ
名立恋 かきめりじわが水茎のあとよりや淳ふもよには流れをめけん
變恋 男ひきやふかくたのめし川水のかほる淳せにしづむべしとは
寄木恋 日ざかりの行ばにかびくねぶのはのまれヒもあはれ愈むす

富士草恋うちむれてつみし春空の土寧に、ろづくしのはじめありけむ
曉 あり明のかげもさやかにさしぐしの曉きよきまどのうちかな
富士 さくや姫しづまりましゝ神代より雪井たかくひ白ふはらすか
山影寫水大ゐ川そこにぞみゆる後士がくだすうき木のかめ山のかげ
瀧 岩かどにくだけておつる白玉はこゑのにほひかうぐひすの瀧
にしきのうらにて

もみぢ葉のこかう色とみゆる或秋のにしきのうらのいさり火
市 はしたかのをふさの市方春されば袖ありはへてすいなうる
名所松 玄か代の子代の根なしもあらはれて神さびたり吹上のまつ
恵因松 神島やいそまゝ浦の松が枝に白ゆふかけてしまきふくあり
文字 白がみの穢べの千どり跡とめてきえぬやちよの寶あるらん
水車 波上う水は田ニとめぐらむ塩川のくるまよどむまもなし
曾子圓車於腸母之間といふこゝを

道ならぬかたにめぐらで引立す車のあとそよにはのこれ

旅女 世にかはる身こそつらけれあすがりうき世漏りの業も多き也
往事如夢あれ世は夢のうき橋うきてのみすゞし昔ぞくやしゃかりける
(古漢集)

(附記)

移本掃部は予が外祖父(予の生母の父)にして園陵寺
の退修帳には加門とありとの事あり

昭和十九年三月三日 外孫 宇井鶴水記

名所早春 黒牛のあめの花よまのあめのくじはよじよじけく
は 玄立すこかくゆのねの落もよしよ代もとだひ契重ト ゆは
捨子 いかるは心つよむまたすん子をほ思はぬ就もゆけせよ
(文入三年八百四)
家木君 末孟に取引して人相の木の事もあつてときくよし
(文入五年七百四)
ゆく事も遠き和木の川水に天かちさせかせやといふ
(一編集)

向相鉄次郎君

向相鉄次郎氏下里町傳洋之子医業トヨ内科ヲ修メ眼科
ニテ通石其技中流堂上在ニ古交野、中津三住古賀小学校於
邑ヲニ担任シ先帝傳生ニ親切チキ

氏學爲儒好ミ指氣俗風ト相合セ世自治ニ于焉云々、
ニ名ラホノ功ヲ隠シ有アリ成一其筆ヲ憑ム古交野之吉田塔云者
アラ傳神ヘナシ其筆達用テ此四ト相善カクス成、古里ニ此ニ所存
ノ端、其長桂日、所多マ難不傳日、医師者志武一年ニ就
テ向相ヲ仰座セントス前後數年氏ニ遂ニ古交野ニ西向村
大字西向ニ移住シ貞和、初吉

氏ノ酒ヲ好ミ宿アレ、諸ニニヒ鉄之敏能、後又學流文平ラ栗
蔵石所傳書、南風堂見セキニアリ、アリ成、後傳新考、栗澤

市集移兵，苦勞不得。嘗不一月，因迎之。辛卯下道，有：

卷八

故人不復見，此心空自知。

新編
日本書
卷之二

海の廣り山の勢いの大きさに比べて、此の事は
云々昭和十六年一月一號後又其姪熙齋等、該片口傳云々^此
所今獨眼剣の紹介を農工アリ 昭和十六年三月廿三日 指

古文の回顧

縣立古庄高等女學校其前身古庄師範高師附屬西固村二所
村組合之。乙種實業學校古庄校址大正七年四月創立
不一農科高科併置之。同九年四月乙種高師實業學校改
設立。同十五年四月女子專修科也置之。女子教育の端子開
始、昭和四年三月實科高等女學校轉立全然女學校。更
之名。同年六月募集生停止過渡期の整理並行。後四年
程度の高等女學校十速成。同十二年四月縣立女子移入乙種高
等の宿舎を遂に了たり。
其初古庄町の南二里牛本町下獨力を以て乙種實業學校
設立大正九にて、古庄校と隣接し共用地地相沿く。學校後相等
1.一見二兒を追ひ立つて似たり。乃一色男子の中華學校と

一、他的一生幾乎在中等學校之大社會裡當小學生，一本新書，故不能不暗熟以備不時之需。半途男女小參派濟

進之終り小縣立中等學校たゞ一所耳、古在
柳半平不單獨の設立たり、古在十三縣村組合の設立を寄
合せ常々、而一以此三縣村各其經營を異なり古在大原業
不育地不育業也向才農業主上たり故不組合校の經營
不多少の經營の件は不免か然、富農者十常其懶又有り

由來所付經濟才、小學校の經營院を重荷たり。於上、中等學
校不設付。其負担が重い。而、事務室の小属院、更經營院と大本
の苦病の存立するに益當然なり。而、材料不法苦病たり。從之
了是れに於長大可いの一事業不設備の不充分を以て教科口

如其轉換又轉換、串在附近的學校、相呼應——不尋常的學
校小、於士官等女學校上、本來追不到的去了。

五校之組合。已乙種實業學校之設備。不完全者。有愚陋之
教育小缺點。大約六一。然。經費。不切諸。以。一員。担。不輕。不。一。以。
左右顧盼。漸進轉換。遂。于。育。女。學。校。上。一。縣。營。小。移。而。之。
其。係。也。計。公。女。了。一。才。五。十。以。事。一。十。校。教。能。力。平。勝。丁。待。之。

一九六六、秋、一、一、季常一樣高且倫安為院子期一得、其小非
也了なり。

當子歷代の後長を顧みる所、森彦太郎氏士至り、而以一月
的小進轉じて小速度り大に吉田相馬氏士至り、前任森
氏の計畫を確化一得たりと見る。此ニ氏其自力、其若ニ其功
果實不容易たらず、トナリあり、當時予古彦町・廣住、頼
く三日観一、歡喜慶謝禁一得たりとの折り。
然アハ森氏才智和五年八月車故を以て其職アガリ、吉田氏
之昭和十年一月病ア以て其職を退去後徳高小治丈又氏モ
1-1 景芝移管の際不^レ同ナ被レ一セコニ至リ、此景芝の権^レ付
過多無多の用力告^レハ伏在セテを知ルヤア一から良宗の
蘇明光の管仲論ハ曰く功の成^レヒ成^レリハ事カ不^レ非也。

蓋之言由^レ起^レ所古ノシ。

事の丈小模^レ其^レトナレ^レ、往昔我國封國の末、續田信長公
尾張不^レ勝起^レ、隻手天下大勢^レ傍起^レ、豈豈^レ之^レ豈^レ秀吉公^レ
至リ^レ、統制の備蓄^レ至成^レ、たゞ一代^レ、失脚^レ、徳川家
康^レ、一^レ唾掌^レ一^レ番^レ、其底^レ果^レを握^レ、三百年翁業^レの基^レを固^レ、七
一^レ、佛^レ者^レ所謂善因善果^レ、又必^レ有^レ也^レ、古
り、漢の司馬遷^レ、史記列傳^レ、夷齊^レの餓死、盜跖^レの富壽^レを引^レ論
1-1 天道^レは是^レ能^レ經^レ、而^レ又其批判^レ、百年小期^レ其應報^レ
待^レヘ^レ、^{後^レ}一^レ之^レの有^レ、存^レ在^レ力^レ、
森氏才智、1-1、日高郡初田村^レ、乙種商業學校^レ、延承^レ、十
餘年^レ、卒^レ努力尋常中學校^レ、十進^レ、之^レ不^レ無^レ、^レ移^レ、^レ以^レ者
因^レ牛^レ、病癒^レ、京都市子守^レ、再^レ入^レ高尋常學校^レ、教諭^レ、^レ訓

リ名其天賦の才を全之せらるゝ是致至、予大喜能、昭和十一
年四月京都帯小末リ、何の為古所にて大く餘古を送リ一九、何
の事、岩田式、奇遇、其聲歌、不直接古丁を得て、了り嘉
ヘリ。

治和十九年七月嗣君得之古器在位。廿二年。頤子二氏。功名。
追懷一家。不稱。言之。一。次。稿。而。作。丁。

卷之二

宇根七郎

(老田相處先生。時在大清光緒十九年十月五日題跋)

(前書、及當熙和九年七月廿日寄筒入、後送セラニ) 一京都市外向日町住)

拜復曰者中益布清安奉大賀候 時局は愈々重
大ニ相成ル 真之助は疎開を考へ様ニ

相成久嘗

古の秋ニ降ニ病て床の不甲斐ナリ申 嘆息致居國
臣如東慶左様者か獨リ譲一屋以 管八異事有惑
を共一いしの如ヒヒ一昔今セゼルカ 以上ヒ相成ル已
人皆了か奉 鳴ニ

致ハ相者退職は既 祥十一年一月未リ相成ル

至時上弓道味生後ノ老後を送らる、古延

ト何かと遣鶴平セマセラリ、條久人之出 来テニ其

ノ家服致ハ何れ又後預用候申 上交先ハ布返事

迎如斯ニ跡度外無矣

中根様

吉田相解

一號五輯 寶刑納

(山本惠太郎氏昭和十九年七月廿六日付玉章寫)

拜啓先日玉簡を戴キ早速布候移モト心ニ懸、大ム
殊甚運転の無理を致候為玉訓至玉一臥床四五日前
床致候、之に吹田の梓ニナシ、平傳ノ參、常留様共ニ被妨
御返書思ニ不任遷延不無苦諱無玉安候過日十二月正
一日驟雨乃凌々か一家昨日ナシ又日者成蟬烈々相成申
候

尊體安寧、大く諸健勝不教焉涉候哉幸仰上候
先般換斗様布惠訪戴申候事時節柄申ハ申仰三脚
擇、出来不申失禮慚悚罪在候
初乙拜啓之蒙可得候事ニ端坐候事是ニ亦精治了
致焉在候布氣質、被窺殊同尋ナリ竹と古之親友深く

日本標準規格 B4 (257×364mm)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

感をうけたり所謂一見丁寧舊知を如き感一報一快活交
替今尚愉快を覺る次第、歩空便語笑盡了事と珍別
九段にて御講、怪いと語り合ふ。這回も錯論止と申す
夫々笑ひつゝ、帝制致復事に端坐候次回拜語を待度
念願四種在候

市説古至今地方の中等教育機関設置の説、吾々貴説
通り修事とは是生じて有成るべく、清法程設立三年目
信西向日不脱退ひの「口琴」（口琴を狂歌直接歩合會
藉）（歌日本能寺子在ツ）異論を唱へて大速丸子連
九（古在との意見衝突）二町木道紹平古摺られたる信宿
時之西向日長才清利嘉左右衛門年（先化）高池掛仲
裁後三場二在り其才清利式と銀行重級刊任する已前

才木の取引圖保、古く親善の間柄、有之同氏を説す
高代吉景也（一）多少眞理多シ持一事、（二）西向日
實を挿む餘地本少しの長りてつて修折今回貴由事接
一當時之記憶が曠遠致假事と珍矣

以上之事情才木早知れし人可意之（當時之詳實也）有志才
裕と黄土上帰（一）貴説の當時の所村主脳者外有志（二）
教育才木特不越之才木人（一）才木（了程の人本少一様覺
民信（才木餘り表面不二）其他、該校の存續（二）院説
（一）才木始唱之向有三派、（二）聲氣之熟焉也（方正
了人有りて思出、不得假ことより遺憾）存續本書才木近
認の事、修十思淳厚才木陳經費問題（三）健嘗當時而

向日之醫師向相健次郎君（今古醫學在之承，候）
依嘱一回至村長及有志者談予是傳（謹此）事

原業
原業上を功勞者才別、承、候事にて様記賜致候。唯該
所管至易力業者トシム。幸甚。清石野「民」(元)。右空。謹啓。

漫草上手功勞有大別。承、候事上也。不記膳致候。唯該
所發至。易力。業者。上事也。下事也。津田清右衛門氏。一先代。古至今。經時而
演。易事。詳識。三對。一狀。常。力。至。入。人。行。在。修。事。也。記。膳。致
候。一太。小。當時。漫草者。一。才。斯。向。經。不。獲。了。不。是。智。識。的。人。物。
皆。無。才。才。不。有。其。將。一。古。老。側。并。薄。士。一。也。由。邊。外。之。
片。山。有。三。(現今。在京。の。彼。の。片。山。哲。氏。の。父)。→。右。津。田。氏。と。住。
幸。旅。館。是。工。度。口。會。讀。小。生。今。民。上。其。時。上。く。其。活。也。承
「候」。→。口。二。指。客。候。

幸接氣運，會諸小兒，今氏子其時，其詣名承
之。後之二弟皆經。

ト伊豆船東不遇ノ木家才主其事也)を第一として其二
中漢(玉川竹次郎氏(現代紳士亦云之親丈)之「木村
船同屋」と曰直船(西都日置村)を極不足子次第に大出
店(竹藤久兵衛氏)津田藤右衛門(津田竹松氏の本家)參
位の事が元暦止焉耳但丁寧地圖三事(明治三十
一年)加二年有之其已前の事不全今不申便以上之次第
ノ所角之仰候、少弗參者、傳立了資糧、其是又
遠憾。存候退了奉生事在病之來早慢性之相哉、全治
之於在籍中、方ニ殊甚候、一年先般至木地葉(木は葉之
之相地)、待構工始終甘苦苗百四株本也、三年即構竟
為一植附上、二月二十日給水也頻々致一基直後可

言葉無く、恐々而防言主任や一（ホン）名義大に在り更
候一家、天降の灾害に愁ひ多不申。一（主任感心）微霄
從事其直後又防言演習見學（一）年日以上應付
實不外病氣。是猶易致候と見、懇請早至未復事
ニ皆空無未盡。相成候（ニ）無理。古未不申候是者氣
未分轉（ス）徳才十全尊体千萬端自是是承渡
先手遷延（ス）からず。且布詫止以共。待答候早願首

二

七月廿八日

山本昌太郎

中根賢基

尊手書留ニテ有（ト）御風亭（ノ）修業期

住民・生活

村落ハ住民、食料、有（ト）寡（シ）人集リテ出来タリ。始々食
料少ナモ、荒蕪地開墾シ、又ハ傾斜地ヲ背負金（開墾シテ）山地
ニ耕作スル者、人力（依シ）ニ食料、產地ヲ増加シタリ。生レ告限
リテ、極其（シ）達（シ）ハ甚上、増加シ難ス
人口、殊ナシ、併シ出産ニ依リ、年々増、稼取不（シ）食カ（ス）
去（シ）生産率（高）率（高）ナシ、古來久遠（シ）田代、治化、文政、天保
時代、於（シ）年々、人口調査（ト）アリ、之ヲ見（シ）、増加率僅少（シ）
半、減ナシ多村（アリ）者、産児（アリ）ト云々出生率
時、壁敷シタリ。今（シ）家、存（シ）人、増々、食料不足（シ）來
スハ、當然ナリ

村力ト云アツ村、生産力アツ苦、村力計（シ）石子、當ナシタラ即

耕地、產物ヲ半石取之等計ノ如地、宮地、郡ノ石、換算
シテ其生産者ヲ減シ、斯ニ某源ノ所百石、某村ノ何
十石石林ト之シテ、今ニ止地、衣別等計ノ之、明治以来、コト
也。故ニ某ノ何處、何万石何處、何十万石ト稱、臣下人食福を
何千石、何百石石林ト稱シ、又ハ相当スル知行地ヲ割当テタリ也
之、餘事仁ニ去矣。

食料、無限山壑多シ、幸也少シ、丙午農部三十以降（嘉慶十
二年正月）^ノ、其後多シ）^ノ、固ニ某、該額、民食三
分一、又、止ニ之、實、耕穀ヲ加ニシテ、二分一計ヲ支ニシテ、
△甘藷不作、多作、不足、其内、貢米、出々故、不
足、相當人古ニ上々、故、木、言々、食料ニシテ、

第一回行詣師、嘉慶丙午、奉行シ、十四日、作シシト云云。

本ノ玉ノ生、豈人モ、カニ、乞、之、之、人、嘗て、濟、日、也

ト云、傳、又

入念山林ト、住民又、陳村民一人、需ニ山林、生立物、权藉不
之、實アリ、小口、奇三法、村同、田所時代入、山林、權力、争ヒ起テ
、前、歲末ノ更、古文書、見、主ト、不、言々、持テ、權力ト
、掌送林、毎年、一、二十石、二十石、於、木、言々、拾得、之、不、
云、他山林、權シテ、同様、也。

苦、愁、觸レ考（令達ナ）、百姓、半食不給、林セヨク、因循テ
シテ既、

三、未、時、傳記、皆百姓大患也、頻々、人、被、頭、等、禁制

事少々アレシニ振、國力セキテ安堵セヨトナリト云
上者ノ京ニ二度御之候、某ニ付生シシ者ニアト國ナリ
世音ニ有カセ合辞上見、合村盛森院シタ無跡ノ名
古ニ

明治中期、其ニ津村一泊シタニ里芋飯ヲ食タ、於地
里廿多處ニテバイキ印呈芋、茎ヲ於標シ名ニ代、移
出シテ山中玉蜀黍等野菜シテシタニ家達セリ之言
辞ナ

以上ニ金糸、火薙等、尚不アリ他ニ實ニシテ
衣服、分像者、男子、汗蒸木綿、同様、七八百十丈、傳
水綿種子、木綿草、麥草等、隨分綿セ多シ年月ノ半
年者、足三筋綿、草鞋、草履等、冬期ニテ被スニテ常

傷者ナリ者、平袖、衣服、既治中期、山村、宿泊シタ、更御請
二羽織古ニテ、袖ナシ羽織、互に借リ合ヌト同キタ

農村、農河、女、紡績、機織、木糸、八十丈、綿、長云
才家ナ太十二寸許、三ニテ糸車、以テ一分筋、倍ノ一日、能力
一束、一束角一圓、尺八寸八十四、一尺、十二寸、一經トス
天佐、機織、一日五丈許、テ、山村、不、彷彿、機
織女ナシ共、自ノ家月ニ度ニ、不、他ニ、實ニ、村屋、
商店、店舗、日用百物、新舊、商、一石、約三十六市石
ニ出テ、實木シテ

家屋、農村、禍甚、山村、家屋、既治中期、少、役トテ、
一束、木糸、家出未タ、何レ、粗末、達公案古、家、村屋、主船
御、漁、足、一束、石、大方、家、在シテ、既治中期、山村

卷之三

計ナタリ、枝間トシ墨ハ種ニリタ、草ニテ吳其志ヲ用ヒタ、紫村ニテ
便ナシ、一處ニ墨敷多シ、足其運搬、便否ニシテ、同僚ニタクナム
計ナタリ、暮葉、大工、生治社ナリ

産業の農業、林業ヲ主とし、川舟乗、常葉モア、林野物ハ
木炭、杉板、板、丸太、木柱也。相前、松櫻板ヲ製作、木
炭板等、肩之處大、活躍ノ利用不、渓村、其後ナハ勿論
古、常葉ハ産業権屬、焉、瑞仕入所（瑞仕入役所トニカ）ヲ設キ
貧困ニ業者ニ金料、復讐下付シ、產物ヲ持參シテ、計算
并傍サム之ヲ年中回轉スルナリ、木炭ハ既溶ナリ民業、杉
ヘタリ、不該板等山間、僻地ニ生産シテ、板、木炭轉也、丸太
類、山道ヲ木馬ニ換ナシ、活路ニ經、信皆木太ノ漢、

川流者木亥、於川上、川舟者近也。其所大抵歸仕入族所下之川亥也。昭若時之農亥、少而信不勤者矣。

運搬、山道の肩三三運、男女若從事、不農村、平坦
ル一塞、午ノ用ヒ車ヲ用ヒ、午車ヲ用ヒ、山間、食料
等々運、不滿仕入後所ヨリ帰リ、利用不思、高人林山
間ニ、高人多、肩三三自ラ持行シ、大木ヲ重々不馬、不易
道ヲ作、路上細々松木ヲ核、其上ヲ櫻、如ヤニ載セ、曳キテ
木馬運シ、少シ同駆テ附ケ故、剝、輕々運ヒ得、大抵一人
守リ、足歸其身ナガシテ、舊時代、道路惡カシカ、以故、
薪、草、藁トシテ溝深造跡、用ヒ半担、部々人方車ヲニ負ヒ

高食調味、眞夜、鹽臭ヲ前ニ上向、素々元、桂ニ東
海、生魚、牛二入テ、信州三川魚、海、山後、山村、年魚
引熟テリ所云シ、既往中期、兄山村泊リタリ之ノ宿者
之經シ御ニ古ノ人聲ヲ聴シ、其聲集、タリ因、木路於在ミノア
鑑賞、引キ縣迄ナ、朝ニシテ最蕭条、拾テ得、又、珍美、
樂ニタク、腰、乘セ美シヤ、續、仰向、事首、燒、荷司酒
ヲ拂シ乞シニ、聲、失望シタノト語、山村、食、一經、
詣、序、足、新、二十シタリ、之ニ甘味、所シナ、社稷、代用、
峰、室、聲、次、足ナシナ、葡萄、又、自、家、醸、造、之、岩
村、同様、海村、舊、移、入、不、可、而、濁、固、極、羊、自、作、也、
因、後、剝、莖、草、入、清、酒、於、石、看、山村、農、村、生活、勞、苦

之傳文セシムト
旅行、他地方、旅行、久、文、休、稀、才、久、シ、旅、行、之、京、門、保
証、乞、寄、於、文、少、携、之、既、往、初期、古、晉、酒、民、旅、行、村、寂、人
游、不、居、游、之、寺、莊、之、
村、氏、娛樂、舊、時代、云、神、祭、祭、、金、頭、住、之、祭、賭、博、之、
行、シ、タ、

教育、農村、主、部、之、幸、十、至、二、行、一、俗、俗、主、紀、師、通、見、之
り、山、村、之、少、レ、ア、稀、之、文化、基、礎、所、以、不、古、未、時、代、以、近
、左、屋、之、文、字、之、教、ア、ル、之、ア、他、之、權、之、知、ニ、由、起、不、智、ノ、佛
主、相、テ、微、セ、ア、タ、佛、像、之、差、シ、シ、ノ、佛、像、存、在、之、医、師、病
病、革、除、空、ノ、シ、ノ、消、病、革、除、空、ノ、シ、ノ、事、話、破、ノ、物、紹、承
二、行、之、清、酒、印、テ、書、千、五、十、多、天、一、ノ、商、店、櫻、三、送、物、形、如

星・印ヲ吉十留メ至・故譯カノシ様圖ア

御上度史ヲ考シテ、大方權力有、言述ニ従フ。而シ住民、生活
狀態、及ホリ不設ニ見聞、一端ヲ觀シ候後、參考トス

熊玉十三社又明神ノトニ神ア

熊野三山、諸祭神、古末種々、説アリ、又熊野三社ト云、各山各三社、
アリタル者サキ、三山ヲ總稱シ、三社ト稱シタル者、之ヲ知ラズ、又十二社、權現
ト云之、名山十二社、又奉祀シタル者、各十三社ト稱シタルナラム、十二社之上四
社下八社ト割ツ、名山同様ナリ

現在

平定ハ素盞姑尊ヲ主神トシ

新宮ハ建玉男命ヲ主神トシ

那志ハ伊弉母尊ヲ主神トス、但那志山ハ平定、新宮ニナキ、又國主命ヲ本
殿ニ坐ニシテ、新宮、那志神社トシテ、一殿ヲ造ニタケ、全御ニシテ十三社ナリ、那志
一ノ神体トニテ、又國主命ヲ祀レバ

神靈ニ存ス、古事記之一、說ナカリド、既ニ之ヲ、熊野巡遊記、後スルニ

拾遺

又本宮、主神殿“千本”御守方女神、形才姓ノミ子素戔嗚命ヲ祀ル。如前
二千本、主神“千本”御守命アリト山田精三論断シタク

卷之三

新嘗、船祭等、奉事ノ事有、田植式ナリ。古來今ニ迄行奉テ。
祭日、平之日、四月耶等、七月新嘗、九月行之月、十四日也。

又達志男命ヲ主神ト右社ハ新宮外ニ沖縄ノ那波一宮那波社トシテ祀
クミニテ也。那波國那波社ニ祀ラシマサ御力也。

更ニ又冬季行事ニ田植我アシスト並ニ船ニテ神輿渡御、或アシスト・他ニ類
例アリキト新吉ニ舟祭奉行那谷・田植行事ノルハ此間ニ由来アリテ是
間取セシ内緒ナカニカラス近古ヨリ可有處々謹ムシ長歌一
俗謡狂言音無川二

紀年、國六、年一せり、水止、シタセ五、セイギ、シテ、船五十三社

文昭禪

ト云ア、セセキガニ山・船岡山ト、奉出石、地名、元ト音無、室ト音其申
ラ混ク、小川ヲ音無御川トテ、若川、熊野川、支流ナリ布原、無事川、
善宗川、近ニ善宗川トニ、音無善星川ミ、音無善川共音ニテラム
即ち故、俗ノ平宗、十二社ヲ形五十三社ト称シタルナリ、三十多年間
新宮中ニ舊住シタルモ本宮、十二社ヲ形五、神ト、稱ト、稱不シト、故、外
二ノ門キタリコトナリ、言葉云々祭事、神事、神事、神事、舟ニテ降神、行車アリ且善宗
ハ海幸ニ治ア土地ナレ、船玉神、社ノト音無川縁、十年、船玉神、事、本宮、
善宗本宮、御室人、船玉神、トヨミト音無川、音無川、音無川、音無川、
一社、船玉神、祭、祠アリト云ア如何ニ、御弱ニテ神事、上ルニ、祭ニ思

ハレサクシツヒテ踏査シ止メタリ無レキ本山・コトニ船ヲカル他地方一人ハ該地ニ

本宮ニア社ヲ船玉十二社ト思フナリシ。

姑傍詔、宣傳、比言、言教、學者、古方、神官、有名筆家、宗匠
以上不自トノ人云假ナリ其人甚モ本宮・十三社、宗也、行、紙、墨ナキ船
玉十二社大國神ト称スコト、有シ御敷トビ、骨廟、傳説又ニ碑、
本宮ヲ取玉十二社ト呼フコト、尚存シタケニ非スヤト考ニシキ、地共不審
一ノ外ニ山村ナレ平宮、神社祭典、農村、田植行事マニ由来、何基
シテ是ニツ、不審ナシカ

頃日柳田國男、著書ニテ「妹」力シト題スル出版物、昭和十五年八月九日
新國ノ古事記般左神畫、兄弟二福福、暗示ヲ共ニ、保七慶
務等シタリエト

東京新元社祭行

女ノ神、祭祀ニ最ミ重要ル任務、肩ニシコト

重要ル田植、行事ニ女、カヲ殿ニシタリエ

左等、古例今尚各地、徵ニ神、特、仲緒ニハ稱明、存在
スルコト

古沖縄ノ寺ノ祭、金鏡鑑ナシニテ木々尙ニ落摩、泊浦、船
シテ未リ泊、神ヨリ船玉神ヲ授ケラレ海路迷ハズ帰リタルコト
是等、類例ヲ詳細ニ多數舉ナシテ女性、實、田植ノコト並
船玉神舟ニコトヲ能リ得タクア喜ヘリ也

速玉男命ヲ官社ニ祀クハ新宮、外ニ沖縄、ミナコトヲ緯合シハ無事
三山丸子宮ト那智村ト祭典ニ田植行事アリ新宮、祭典、神興
ハ船玉渡御シセキ本宮十二社ト称シタケコトハ除キ申緒、有ルコト
ア本宮ニ降ニシテ又方猪堅ノ御ツ御ツヘ照相廿年七月二日)

古座文化、葬院

產業、交通、經濟、進歩マニ所其背後ニ先覺博雅、
士、風教ヲ補ニ文化ヲ助ケル者、カソニカラス。古座一地、
往古ノ之ヲ知テ不謬改、頃ニ至リ田邊新宮三十里、
間ニ在リ、約三百年、久シキニ亘り、文化ノ中心地トシ
テ、用、タニニ、地理、便ヲ占メ、漁賈、利ヲ有ス。因ル
シト難ヒ抑亦先覺、士其間ニ在リ、格形致細、義ヲ説キ、
修業齊家、道ヲ教ヘシレテ、其操守スレアリ知ラシタル、力
矣リ。少カラサルヲ知ラサク可カラズ。今其跡ヲ文翰藉シ、微シ破耗
之言質シニ、碑簡遺墨、斧削ニ、上章和宝脣、同ニ僧鉢
開テ正法寺ニ住持シ、學術一綱、高々明和以降ニ武内
義浩アリ、少陵博士以下諸市、廟觀シ著述頗ル多シ。其

于其孫共二父祖、遺業の絧ノ西畠亮明、又養浩、學才藻鬱然シテ文化文政、間名古事記通ニ同ニ懶シ垂レテ子弟ヲ教、晚年安明シテ力ヲ医業專ニシテ次子素行亦医業トシテ醫行ト、其門三世ニ上野三齋及伊仙丁共ニ医業トシテ技精ヲ學優才而シテ仁仙、卒先シテ外國法ヲ修、又書ヲ能シ不善未半段、後子三齋作仙、後僧寶堂下僧萬慶丁學預德人之仰キ吉田正一ア才能明敏眾之根、同時、祥保江村津田華山下、文字ヲ好ミ竹簡墨シ葉ミ風流雅淡ヲ以テ地方、推重シテ禁書未多幸、頃ニ明治昇平、時反テ其他齋藤慶則、守松一學、昌平之吉工門寺寺アリ、其師承云所ナ明ニセサリ、一時有為、村ツツノ梅セラル、惟ツ性平、盛ニ及ハカル、亦多工詩ニ、唐ナシシハ

テ之近年鬻學、風流ニシテ教育月々進ミ、至運年、新
之時ニ方々隠レテソレ被、遺タルヲ於テ遺稿、後世ニ傳
ハシテ文化ノ由來スル所ヲ知ラシムク、從一再ナラタク、思ヒ不破
ノ顧ミテシテ最テ見同ニ所ナ收錄ス、其脱漏誤謬、存ニシ
エ、ニシテ讀者、補正、俟ヘト云耳

信錄

鉢岡、中澤正法寺、第三世、過生帳、妙心院第一卷瑞光
中興兩山人鉢岡玄旨和尙、正五歲五年八月五日寂、十六年外
出雲生緣嗣法南歸和尙ト、正法寺中興、人ニシテ辛運
衰退、降、換回シ法燈、時落、時、輝シタルアリ、無歸、
贊記、人鉢岡、詩ヲ叔ム古在入勝、宋スル下、待ニ、其
ニシテ舉ニ

古座晴庵

小市斜町江濱畔 風景古座興、稿新、南山翠晴
偏好、般舟參、善樂入凌

住吉秋月

幽谷怪叢封社丘、百年完景最宜秋、全段萬頃月
晴夜、一曲棹、素發翁舟。

以、其與子詩、一班、硯、或曰師、閣濱具足人。

玉川玄林三十

玉川氏、整中漫古東谷、北跡、在、古碑下、武内義
浩之墓下勒碑、謹、長子玄林、撰、序、曰：

姓、字、內初名玄龍、晚改義浩、字博瀾、号、霞塘泉溟

人、承、內宿祿之裔也、自幼好遊、而、高志、民、杜、徒、家、於
魚、界、潛、之、馬、鹿、之、學、一、草、思、獲、麟、之、經、著、不、刺、通、鑑
綱、目、二、百、餘、卷、明、文、新、連、體、文、清、奇、宣、政、之、初、南
京、官、相、深、泊、于、外、命、掌、筆、譚、著、清、客、筆、談、錄、後
歸、月、僅、一、文化、癸、酉、三、月、十一、日、卒、年、七十

銘、曰、彌、遠、遺、兩、教、被、躋、嵩、崇、先、明、不、舛、厥、之、以、成

長、男、玄、龍、記

養、孫、碑、下、一、墓、陽、玉、川、玄、林、之、墓、下、少、益、養、浩、長
男、玄、三、和、諱、山、瀟、菊、池、元、旨、寔、治、八、年、五、月、社、野、之、遊、
三、山、紀、略、著、下、記、中、曰、

六、日、仰、而、斧、持、至、茶、地、浦、適、玉、川、生、来、後、刺、其、父、瀬
齋、先生、隱、于、鑒、好、畫、博、涉、嘗、著、日、本、通、鑑、二、百、餘、卷、

手書一許歌 我公今年七十有五健三、興文石門不遺
縁語多々謝去

元習古在浦ニ一泊シテ雨。宿乃村。笠セントイ時。玄蕃
其旅舍ヲ訪。ノ言本。際縁語。遣アラシシア別ノ遺憾
想。可シ。

長男玄蕃ノ碑。下。又玉川彦能墓アリ。背。刻ミテ曰。春秋
祭祀以時思之。唐應三年十月十一日。是。義良浩。孫玄蕃
玄蕃ナシシ。前。元年三月。齊藤瑞堂紀南。勝。探。其
著南遊記中。

主人命泛西船。在於島前。共。醫師玉川麻薺。導。全俱
乘。其一舟。

トアリ。其雅游。此。シント見ニ

義良浩著不詳。無序。巡覽記四卷。本朝通鑑綱目二百餘卷。四史
解。連壁文隨。清宮等詩錄。藝叢各若干卷。而予今存者
云。僅ニ無序。巡覽記。詩。識。惜。可。又。無序。巡覽記。
東海勢山田ノ假設。一西田近。至。沿道。地誌。シテ尤。有用。
著。而シテ又其遺墨。存。元。僅ニ古社。青原寺。
高丽。模津。宋系譜。一卷。西向。小山氏。家系。一卷。牛溪人。王
川。義良。大島。木託。一。順。以。減。不。之。共。其。書。端正。溫
雅。一字。工。尚。可。貴。千。立。稿。稿。玄。蕃。著。述。
アリ。同カサレト。此。之。父。祖。遺風。紹。承。地方。重。有。為。シ。ク
カト。云。

西畠亮明

古座青原寺坂。巨碑。二基。一一。西畠亮明之墓。十一

西畠素行墓下 載明墓誌銘丁刻セシテ 其後孫氏
一族不友人又原晋齋撰下誌以之其人ト焉ノラムニ是

曰

西畠亮明墓誌銘

西畠字三宇亮明、号林牛、其先泉州左海人、家世商賈、
及祖諱義宣、住南紀牟浦郡古瀬浦、遂焉南紀人、父諱
某、勤儉克家、父某及亮明二世並焉呈正、以其勤勞、國
主命為鄉士、亮明少好文筆、師事鄉人武内玄林、天性
博識、凡百事如一觸即目終身不遺、以故諸士皆雜技不
甚用意而能通大體、尤善書兼精医事、半年不
寐、家無一毫、又罹眼疾、人皆傳其不治、亮明嘗之
晏如、文墨自樂、及齡三十餘、眼疾日篤、自知其不愈

乃悲於刀圭、精神之所微、亦自妙其術、鄉曲素信亮明
之為人、病者競遺其門、失明之後十年間、因得以數口不
斂、家產亦漸復旧云、天保七年丙申暮三月二十九日病
歿于家、享年六十有四、墓于古塗青原寺光榮之次、有
三男八女、長子二十五、其弟亮明興人有恩、其死鄉人舉
惜云、古在地僻俗鄙、自昔其從事文墨、僅獨有武
內博顯、之之之後、其弟亮明已盲矣、然稍能摸索索書方寸字、其再
遊遂不能復書字、雙手撫字、號三株叶子名、而詔曰致於
世事眼既瞑矣、百年之後、幸乎子之一筆顯音墓
則足矣、余詩詔之、丁酉之冬、重遊古塗、亮明既死

矣、及其屬續、申遺言于姪、以墓誌訖、序云、于廟其死、
灑然不若淚之所從、遂為之誌、且系銘曰、

伍真縣今崇橫鳥、私號文於叔莫鄉、鳴呼亮明、
無異之哉、

平安大原錫光撰

亮明、孫、中澤、齊藤氏、嫁々、年九十、幼時亮明、
平生ヲ何キ皆能ニシ記ス、昭和四年八月某、逸事、誌
テ曰、亮明家廻船同屋ヲ營ニ、莫爾ヲ無事、左屋、傍鄰、
抗論甚力ナリト難トモ逢、敗訴トア、園村豪慈集、施フ
ニナシ、適亮明家、在テ、帰リ、之ヲ聞テ歎然、自其後、
嘗リ、ニシ周參見、代官所ニ訴、代官、謁シテ具、其事由
ヲ陳シ、古座、漢權ナ俾、一司ラ懷中ヨリ出シニラ呈ス、

白雪や暮の二葉ロウブー、ト代官受ケテ微吟低誦シ
筆ヲ執リテ、間ナヘ、ノミセテ、色ナトテ、薄、係マ古座、主
張ヲ察、禮節ト陽日交代ツビテ、出演シム、御臺初ニ社員
ヲ附キ木ノ亮明、功ヲ頌シ其徳ヲ仰クト云、又曰古座、喜照
方丈、其裏方夏目ト邊言アリト相思、相語ナルコト三年、社
徒寺周旋カド、雖トモ堅ク持シ解ケズ、因マ亮明ヲ勝ス、亮
明一日國故ヲ懷ミ裏方ヲ訪セシ之ヲ示ス、裏方一讀シテ
寂然自悟ニ復舊、如ナジト云

亮明、句集散逸シテ、一二存スレモノ、古座、旅舍玉井作其傳
十室樓、託シ藏ム、遺墨僅ニ此記、惜ム、キナ、記、曰
丁室樓の記

實不深不廣、ヒトツの樓也、常十旅客を占ム、而既生

羊をも着の頃、この樓子登り、静く、月の色を受す。
主く一陶器、唐末事と盃を傾け、酒一酌。すこ一観
り出で、この樽の詫をせしむ。あれど、其素より於て表
水、あひたぬ才と不しくとも、一とて、せかく、仰口さへ仕え、
福舟の、古文がたくて、つどあや、筆をとり、とさかく天地の
向きをかたれ、東を濱を、洋海を、権野峰雲の如く
そ横たへ、其本に、勇氣と、立ちせば、烽火と古の内れ、
左右に、猿と舟、鳥の飛び上へて、さんかく、山、島
島と、端牛の角をうかべ、十計を、けり、鈎たる、小舟
小舟、輪船、乞人、事安、大島の港を、真帆片帆夕が朝
古を、涼しく見、晴る岩屋、いへく、おじい、詠、絶え消
岬を、南下。一舟、薄日、演習草、いく重の春の深ふらん

橋枕と斜りけりて、雪を半分、目出たる、之一ま頭
の頂に、真緑と、照る日不映り、玉を志く、かと、經て、れ往
吉の隣の網引を、茅折と、假り、夢半人破る、一
た西向と、降る其の下、空海聖の跡を、垂経云々、かと、
翠の除く、往る、外山の花と、誰か、いそぐ、や、父と、じんと、たゞ
泰、名前、かと、六月の、波木北は、流れる、達からぬ、物を、いせ
一秋人を、かと、想、前と、古座明の、流離を、とて、一夏夜を、
一十六、十七日を、十都と、岱木林運、舟の、蒙志せ、川合寒入
今、の夜と、小夜、篠の舟耳、玉と、山まで、客の、こゝ、と、か、動す、な
らん、室一瞬、下と景を、見盡す、けり、一聲、擣と、所、い、
一聲、一聲、一と、走へられたれど、古城山の、入相、一と、
こんと、向、一と、年を、と、地を

か暮れ日ひとちり向ひて一矢、
文化十餘五週年歲實錄生於元日

金逸軒

野牛誌

西畠素行

景行・真明・子一平五・弟・至業・連承・研鑽・詩究
父・名彦・墮サス・自持スルアト謹嚴・人ヲ待ムアト寛裕
ナ・貧士窮・首アリハ施療・授藥シ・其價・耳ラス・曰三地
方・革ニ於テ多々畫不能・ノ・脚以テ自償アリ駕行ツ以
同二、

上野三齋・年仙

上野三齋及上野年仙共・医・業・學・識・技・能・傳・輩

之造工・遠近治・乞・者・夥シ・三齋・古彦・往居・仁者
也・葉向・整・用・子・前・薦陶・年仙・毒症・ト・云
卒・死・シテ・附・法・修・名・声・特・著・ノ・性・喜・破・清慎・雅
趣・詩・絶・品・述・一・又・書・能・之・斯・墨・半・竹・川・人・之・口・譽・重・大
始・大・後・次・テ・済・本・同・生・本・往・晚・年・古・珍・移
ル・三・齋・年・仙・ト・族・類・チ・嘉・永・ヨ・明・治・初・ニ・及・不・共・其
世・武・臣・ニ・シ・テ・遁・レ・ホ・地・录・シ・モ・ト・云・同・仰・仙・父・教・萬
國・教・シ・善・シ・其・名・高・シ・ト・

祚保江村

祚保江村名・市古工川中景・人・家・世・壽・油・藤・造
ツ・葉・上・文・事・好・此・葉・餘・恩・難・樂・久・延・新・後・壽・平
ラ・廢・セ・ラ・ヤ・自・費・ア・授・シ・テ・和・歌・山・人・野・篠・藏・聘・シ・絆

序所ノ用ニテ子弟第ニ教ニ、實ニ明治四年ノ後古座小学校、創立セラレタリトキニテ鹿久、次ヲ以テ校委員トシテ學事ニ精勵シ、教佐スリ所少カラス、十二年元長ニ命セラレ一月ニシテ辞ニ、依然學事ニ當シ、十六年春ニ以テ辭ハ後病テ致ス、大正十二年小学校創立五十年ノ式日ニ方、往々・沙須シ追想シテ古座跡ヨリ之ヲ表旌セラバ、江村南風ニ以下萬物ニ尊ニ景慕ニ若鳥ノ能シス、文友名士多シ

津田清右衛門

津田清右衛門、華山下号ス、又花陽、號士、号アリ、古屋源一丈骨子、人ト為、明敏鮮才アリ、文學ヲ好ミ、臨池ノ樂ム、常ニ向墨、士ヲ近キ、文ヲ先シ莫知名、人ニ納ル、内角古

香、石橋雲来、村田香谷、山下萬兩、及墨仙、綠村、廣隆、琴杖ヲ古音ニ與ニ有其名、雖ハ才アリ、華山音ニ能シ雅健ニシテ俗流ヲ捨テ、又時、重苦シ揮フ、詩アリ、戊子春興、

月訪梅花為好主、梅迎月影為佳賓、佳賓好主雙清絕

管領萬局一刻春

明治二十二年元旦
曉鶯啼處東天紅、雙松早已弄青風、案之算之新年宴

去年魁列賀、賓中

足題

美人因美苦、才子為才窮、請君花蟲艷、同鳴亦落風

又

友是峰食足君子 春風影裏為生涯 一卷一百乾坤
洵家之芳園皆我家

華山明治五年左遷トナリ、後歸、六年取締トナリ、次ニ副
戸長トナリ明治二十二年歿ス、長子清右門家ト延キ、次子
豊次郎出テ、藤田氏ノ嗣ガ、豊次郎亦詩歌ヲ善シスト云。

傳質堂及滿慶

質堂、半澤正法寺第第八せす、學深、儒者、城性路
漢物、孤高セス、里閭帰依ニシテ有事、其名端流、著、
「本鄉田原村、生」明治六年卒、質堂、裕教ヲ受キ、
「古道少ナラシ、繼之、廢官、千林文氏」外其名也。

滿慶、古菴、人、佛學、通、儒學、高修不怠、人教

一華ノトシ儘ス、山本阜一再湯川良太郎弟共、其門
ヲ出テ、有為、材トシ、滿慶誠徳、高、鄉党之ヲ仰、明
治二十三年仙化、青不赤第十四世、詩号、曰、
「世子牛思ひくの物、三君一未く、津江舟、ゆく」
古菴、草木遺墨二帖、序、羊齒風箏、達筆、書、
追悼

嘉慶廿十月丁酉廿三十三年九月廿日之、乃作

一ノ

國林四月綠連、葉、石榴花、夏秋、三十三年、何所
見、杜鵑啼血五月前

吉田正一

吉田正一、中陸、人、學識材幹下、維新、際、吉田貢、吉

8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

田三郎古工門ト其名ヲサシヘニラ最敬ス、明治七年茅
七丈區工小區、副工長トす。古座川西三ヶ村、村役ヲ生
寧々、明治十四年郡役所ノ置カル、ナ郡書記、後擇セテ在
職数月ニシテ歸ニ帰ル、帝ニニラ教育事業ニ用牛貢献シ
所シカラスト云、明治十九年歿ス。

齊藤慶則

齊藤慶則、古座一人子雄才慧敏斯故頭角一見、人
望、肩シ自古期スル所アリ、有田郡、濱口吉工門卒、
橋倉助、知遇ニ蒙ク文政、赴キ豪商濱池善右工門、店
入、權セラレテ從商頭トす。平賀ノ商界、羅々、驥足ナ北海道
道、同孫仲人事志ト遠ノ所アリ、後諱シ、浪花之志シ、明治
三十三年病ニ死ヌ、時人之惜也。

寺松一掌、島津之右工門

寺松一掌、島津之右工門共、學モ好ニ芝翫ヲ以テ雅也、明
治六年古座小学校、同カタニ共ニ其慶宣、補セラテ教鞭ヲ
取リ、當時、少子過域、宣ミ今、古於、高池、明辨、小川、西向、
大島、久村、亘リ、程度ニ於ク中等、類シダリト云、寺松
一掌、牛漢ニ住シ明治九年十月任七丈區工小區語、副工
長、任ヨリ在職一年シテ退キ、島津之右工門、明治九年十
二月古座小區代、舉ケシ郡一區編制議、實務、降ニ及ヒ
罪、ソニ私窓ニ開キ児童ヲ教育ス、
山崎峰信六傳、玉井善右工門
岩崎峰信六傳、貞先佐原十郎古工門爵義連ヨリ出ツト云、
家、廻船同屋ニ蒙トシ、門主繁榮シテ洋畫家ヲ以テ開工傳

兵衛文蔵ニ創ミ、筆耕ヲ喜シス、明治四年、其前トテ
六年副戸長ニ舉ニラレ七年之ラ、辞入、
玉井至吉門ニ代ニ旅舎ノ業トシ、家名遂ニ同ニ、善古工
門君ヲ讀ミ識見アリ、御聞事アレハ辛ナキシ、斬於ニ努力、
又宣ニ渙陽軍械、衡ニ寄リ政事ガカラズ、共ニ古參人ニ
トニ詫方ニ准レ、善古正リ、祖父作古、國歿ヲ善ニシ
好古ト号ス、吟咏誦不一キニ、多シト云、遺墨、家傳フニ元、
僅ニ、曰

黒志半八圖子題ナ

有らば此ノ年中、月日アリセオアリテ又ノく浪の玉ら玉

高柳市易

高柳市助吉登、住ニ木櫓梁子、讀是ヲ好ミ、草、茶行ナ

年シ書舟ヲ懐ニス、一年ト六ニ進接丁ニ社ノ学者ノ叢書カズ、
又俳句ヲ巧ニシ其名著ハ、新ニ指道ヲ請フ者少カズト云、
村翁、玄翁、草野後ニ舉ニラレ在職二年、志ヲ以テ辞ス

昭和廿三年九月三十日、書于原東、古參人

該存

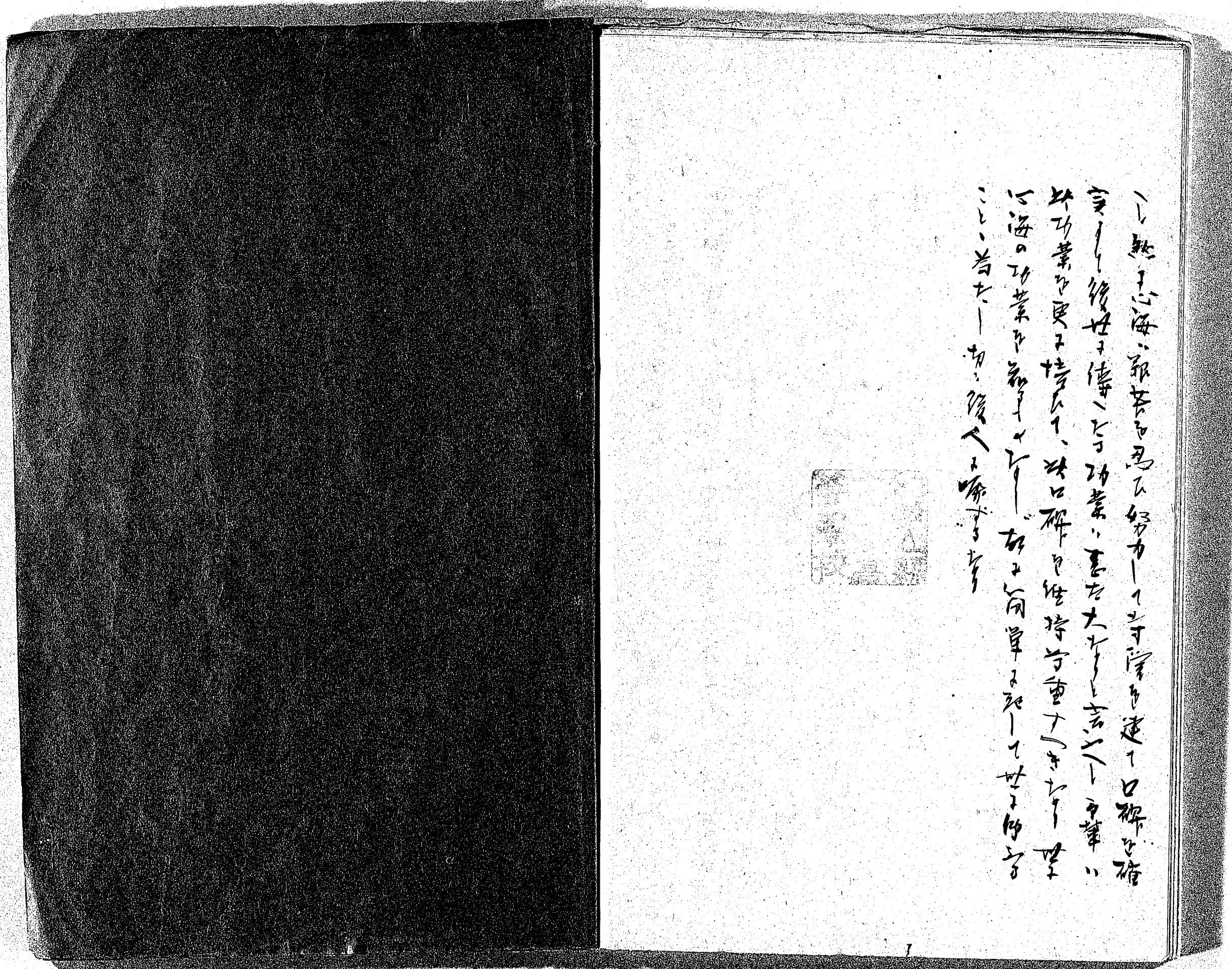
七甲

卷之二

西向拜望歸山。古刹神廟宇。用甚小。弘法大師有碑。古來口
碑不傳。其文石碑之。而刻於木。大師塔地土。銅錢也。
北大士。石碑。經水。有碑。慈化寺。石碑。之。古如是。甚古。
要。古。舊。數。碑。有。摩。方。碑。及。尊。重。十。字。承。要。古。一。

古用大移瓜民不以絕有二神廟宇之安矣年多以晦之小人
之制三十里由祀不外之支祀祭之也。之海之東之二水出一
西之臺白浦焉修築廟庭一之建碑一也。有古碑一吉年院
大帝之號也。巡鑑一也。記文一言傳一有古碑一也。然則
大帝之號也。巡鑑一也。記文一言傳一有古碑一也。然則
文安矣代之號也。有古碑一也。歲之達致十日。然則大帝之號也。

「此志心海、罪共不無努力、才薄多遠、口碑、之確
實、後世傳、功業、莫大、言、之、草、」
「功業、更、持、口碑、維持、重、」
「海、功業、前、之、」
「、首、一、而、後、入、」





8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03968 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9